

## 幕末明治の写真師列伝 第九十三回 宮下欽 その十五

敵は大工町の裏側の堀川の堤に土塁を築いて猛烈な砲撃を繰り返していたが、急にその砲撃が止んだ。そこでこの様子を探るために斥候隊による偵察を行うこととした。斥候隊が大工町の橋を渡り、大手前の七軒町まで行くと、ちょうどそこを通りかかった土地の者に会った。そこでその者に長岡軍の様子を尋ねてみると、長岡兵は全て長岡城内に入ったという。そして案内してくれるというので、その者についてゆくことにしたのだが、その挙動が極めて怪しいので、その者に同行しつつも警戒しながら徐々に進行することにした。するとその者が急に走り出したので、発砲すると長岡軍の伏兵が四方から一斉に銃撃してきたので、これに応戦しつつも後退することにした。この後退の際に神田町で路上に放置してあった弾薬を発見したので、土地の者に刀を抜いて脅して協力させ、自陣まで運搬させることにした。この時の弾薬は中島にいる軍にとって極めて助かるものであった。後にこの弾薬により敵の襲撃も防ぎ止めることになった。また、四郎丸、宮内西村で守衛、駐屯していた松代藩兵も7月25日暁以来、敵の重囲を受け苦戦していたが、血路を開いて浦村方面へ撤退した。浦村に撤退した松代軍は26日、信濃川の東岸に渡り、妙見口の藩兵と合流して、長州藩の1小隊と共に三俣野村に駐屯し、川周辺の守備に付いた。

一方、長岡軍に長岡城を奪還された7月25日暁、亀崎砲台に対しても、敵の砲壘より激しく砲撃があった。そこで偵察したところ、敵の砲壘附近には200名位の敵兵が潜んでいることが判った。そこでこの敵兵に対して、ちょうど松代藩の総括隊長河原左京が松代藩兵配置の砲壘巡視のため亀崎砲台にいたことから、急遽、八番狙撃隊、三番小隊、大砲隊2門を指揮して、敵兵の攻撃に対して防戦に努めることとなった。この防戦中、長岡方面より火炎が上がり、砲声も激しく聞こえてきたことから、総括隊長河原左京は容易ならぬ状況と判断して、「亀崎砲台を死守すべし」として各隊の兵を督励していた。しかし、近郊の桂沢、加津保沢、椿沢部落はすでに敵兵により火の海となっており、敵の砲撃も益々、激しくなっていた。

実は前日の24日夕刻より、筒場、大黒を守備していた官軍は敵の大軍により攻撃されて撤退していて、この地は敵にすでに占領されており、各所に放火されていた。

さらに25日正午には敵の歩兵隊が、官軍が撤退した山上の陣地の駐屯地にも次々と放火しているという状況であった。このため亀崎砲台を守備していたのは松代藩兵のみという状況であったのだ。松代藩兵は周囲を敵に囲まれて、孤立して奮闘していたが、「急いで撤退せよ」との命があり、松代藩兵は一体となって一方に血路を開いて撤退することとし、ようやく後方の比礼峰まで昇り態勢を立て直すことができた。するとちょうど山下で、他の松代藩兵（六番狙撃隊と四番小隊）と長州、大垣の藩兵が敵の攻撃を受けて苦戦しているのが見えた。そこで直ちにこれらの救援に向かい、交戦して、激戦、数刻後によりやく敵を撃退することができた。

26日は、比礼峰まで撤退して来た松代藩各隊の兵と、他藩の兵を待ち、翌27日早朝に急いで山を下りて、半蔵金村に入った。ここで荷頃口より撤退して来た松代藩の一番小隊、八番大砲隊とも合流する。そして新たにそれぞれの守衛部署を決めて、守備し

ていたのだが、29日に参謀より命があって、この地からもさらに撤退することになった。

このような情勢の中、鎮無府に於いて協議の結果、官軍の増援が決定して、薩摩、長州、高知、芸州、鍋島藩の兵2000が新たに派遣されることになった。

7月24日、これらの増援の兵は軍艦5隻に分乗して、敦賀湾を出港し、途中、佐渡島の小木港を経由して、26日朝、新発田藩領内の松ヶ崎港に入港、直ちに上陸して、同盟軍の本営としていた水原（すいばら）、拠点の沼垂、武器弾薬を外国人商人より入手していた新潟港を攻撃、進軍して、29日にこれらを全て占領した。これらの進撃については全て新発田藩が教導した。新発田藩による同盟軍の裏切りである。この新発田藩の裏切りに同盟軍は憤激したが、兵力も少ないため、やむなく海岸線に沿って弥彦村まで退却していった。

7月27日、長岡城の奪還に成功して長岡城に帰城した河井継之助の主催により、会津、米沢、仙台、桑名藩の諸将と協議の上、各兵を分散させて、十日町、蛇山、村松、前島、森立の官軍の前面に進軍することになった。この進軍中の29日に、水原、新潟港が官軍に占領された知らせがきた。このため、同盟軍の士気は大いに阻喪して、栃尾、荷頃方面部隊が森立峠を占領できただけで、その他の軍は守衛の征討軍に反撃を受けて退却するという結果に終わった。本営の水原、新潟港が官軍に占領されたという事は、奥羽越同盟軍にとっては大打撃で、官軍にとっては越後戦争勝利の決定打となったのである。

7月29日、これまで苦杯を舐めさせられていた征討軍は二方面に分れて、反撃の進撃を始める。まず妙見口本道を進撃する軍は、敵勢力を追って十日村に入ったところ、敵はずでに逃走してなく、そのまま追撃して宮内村に入った。するとそこで敵が攻撃してきた。当初、松代藩のみが戦闘、苦戦していたが、薩摩、長州藩兵が救援してくれたため、松代藩兵も大いに意を強くして戦い、敵を敗退させることができた。敗退した敵は後方の宮原村の砲台を守衛していた兵と合流して、追撃の松代、薩摩、長州藩兵の軍と対抗する。この宮原村では敵は堅固な砲壘を築いており、大小の砲を激しく撃ってきた。攻撃にあたる松代、薩摩、長州藩兵は、砲壘前の溝の中に、半身水に入って散兵して戦う。この時の戦いは一刻半（約3時間）におよび、各兵の銃筒は熱で焼けて、お互いに水をかけて銃筒を冷やして撃つ状況であった。また昼も過ぎて、各兵は朝、昼食も取っていない状況であったため、飢えと疲労でくたくたという状態であったが、敵も同様であったためか、ついに征討軍の攻撃に屈して砲壘を捨てて、敗走していった。そこで直ちに砲壘を占領して、本道を敗走する敵をさらに追って追撃する。そしてそのまま前進して六日町まで進撃した。この六日町は、長岡より後わずかに二里の距離にあり、長岡城を遥に望める地である。

しかしながら、宮内村の激戦で、松代藩の第三小隊長を務めていた司令加勢（隊長代理）の祐津千馬之助は隊員の先頭に立って奮戦中に敵弾を頭部に受けて、貫通銃創により壮烈な討死、戦死した。またこの時の戦いでは他に第三小隊の隊士、島津左織、永井芳太郎、軍監方付属の小池乙司の3名が銃弾により負傷した。

（森重和雄）